

# スポーツと子どもの発達に関する研究

—子ども向け地域スポーツに対する親の期待感と効用感—

## Parents' Expectations and Satisfaction from their Children's Soccer Club Activities

金子勝司

Shoji KANEKO

九州工業大学 東野充成

Mitsunari HIGASHINO

村田敦郎

Atsuro MURATA

### 要約

幼児向けのサッカー教室に子どもを通わせている保護者を対象に質問紙調査を実施した。サッカー教室に子どもを参加させることによって、子どもにどのような効果が得られたと感じているのか、保護者の視点を通したサッカー教室の教育的効果を以下の視点から明らかにした。その主な内容は、地域スポーツにおける子どもの人間関係、地域スポーツを通して子どもの社会化過程の分析等である。

結果、子ども向けの地域スポーツ活動の場合、保護者の意味づけが子どもの参加や脱退、活動へのかかわり方に大きな影響を及ぼしていることがわかった。それは、ひいては子どもの発達や社会化にも影響を及ぼすということである。その意味で、今後、それぞれの活動が足りない部分を補っていくということが重要になるであろう。

**キーワード：**地域スポーツ、子ども、教育的効果

## 目次

- I 地域スポーツと子どもの発達
  - 1 子どもの発達社会学
  - 2 地域社会と子どもの発達
  - 3 スポーツと子どもの発達
  - 4 本研究の目的
- II 調査の方法と対象チームの概要
  - 1 調査の方法
  - 2 調査対象チームの概要
  - 3 調査対象者の概要
- III 分析の結果
  - 1 サッカースクールに対する満足度
  - 2 サッカー活動に対する保護者の期待感
  - 3 サッカー活動に対する保護者の効用感
  - 4 まとめ
- IV 参考文献

### I 地域スポーツと子どもの発達

#### 1 子どもの発達社会学

人間は、生誕から出発し死に到達するまで、様々な集団に所属し多様な他者と相互作用する中で、身体を変化させ、認知や情動を獲得し、知識や技術を蓄積していく。こうした過程の総称が発達という概念であらわされるものである。発達には、身体的な変化（成長と老化）ばかりでなく、認知や情動、態度といった心理的な側面、集団において他者との相互作用の中で培う価値や規範、行動の様式といった社会的、文化的な側面も含まれている。こうした、身体、心理、人間の社会的、文化的側面における変化が生涯にわたって継起するのが、発達という現象である。

しかし、人間の発達現象がもっともドラスティックに生起するのが、乳児期から青年期にかけての「子ども期」である。ここから、子ども期の発達に着目する様々な研究が生み出されてきた。身体の発達にかかわる小児医学や運動生理学などでは、子どもの身体の発育段階や発育の速度、標準的な発育のサイズ、発育に必要な生理的、環境的要因などが明らかにされてきた（生田 2002 参照）。心理の発達にかかわる発達心理学や児童心理学、教育心理学、精神医学などでは、子どもの認知や言語、知識、態度、対人関係などがいつ、どのように発達するのかを明らかにしてきた。また、「愛情剥奪症候群」などの臨床

事例は、子どもの身体的発達さえも心理的安定と深くかかわっていることを示している。

一方、子どもの発達にかかわる社会学的研究（発達社会学）では、社会化などの概念を駆使して、他者との相互作用の中で子どもが自我や価値意識などをいかに形成するのかを明らかにしてきた。ミードの自我論では、自我を主我と客我に分類し、客我を他者の役割、特に「重要な他者」や「一般化された他者」の役割を取り込むことによって形成される自我の一側面であると提起した。つまり、人間は、自我そのものでさえ、他者との相互作用がなければ形成することができないのである（Mead 訳書 2005 参照）。ここからミードは遊びの発達段階論を展開し、子どもの遊びが他者役割の模倣であるプレーの段階から、他者役割の取得を成し遂げたゲームの段階へと発展することを提示した。パーソンズの子どもの社会化過程に関する研究では、核家族において子どもは、口唇危機やエディプス危機など危機と安定を繰り返しながら社会化されていくことを、道具的役割たる父親と表出的役割たる母親との関係から提起した（Parsons & Bales 訳書 2001 参照）。この AGIL 図式に対しては、核家族を前提とするものである、ジェンダーの視点を欠いている、発達における人間の主体性を軽視しているといった多くの批判も寄せられたが、子どもの発達を社会学的な視点で分析することの重要性を今もって強く提起していることは間違いないだろう。

このように、子どもの発達に関する社会学的研究は、発達における集団及びそこでの他者との相互作用に着目することの重要性を喚起する。ここから、所属する、あるいは準拠する集団の中で、子どもが他者といかなる相互作用を取り結び、何をどう発達させていくのかを明らかにしようと問題意識が生起する。

## 2 地域社会と子どもの発達

現代の子どもたちの生活の大部分は、家庭と学校によって充足されている。ここから、家族や学校を対象とする子どもの発達社会学的研究は多分に蓄積されてきたわけであるが、一方で子どもの生活は家族と学校にのみ限定されるわけではない。地域社会においては、子ども会組織や習い事、社会教育施設などを通して、同じ地域に住む大人たちと対人関係を取り結ぶ。また、同年齢あるいは異年齢の子どもたちと、学校を離れた仲間関係も展開する。住田の一連の研究はこのような地域社会における子どもの人間関係や発達過程を明らかにしたものであるが（住田 2000、2001）、これまでに地域社会における子どもの発達を明らかにした研究は決して多いとはいえない。

しかし、地域社会は、家族や学校とは異質の存在であると同時に、その教育作用も決して無視できない対象である。地域社会は、性、年齢、職業、生活様式など様々な立場の人間が交錯する一種の小社会であり、そこでの人間関係は、家族とは異なり、容赦呵責のないものである。このような場の中で子どもは、個別的な価値を離れ、普遍的に通用する価

値や規範などが伝達される。特に、かつての日本の農山村のように、地域社会が生産共同体として存立していた場合は、地域は家族以上に子どもを教育する場であった。そこでは、他の家の大人たちや年上の者たちから、遊びや労働、儀礼など様々な生活上の知識、技術が伝達され、本人もまたその知識や技術を年下の者たちに伝達する役割を担った。それを制度的に組織化したのが、若者宿や娘宿、寝屋子などの地域教育組織である。

ところが、第2次世界大戦後の大規模な産業構造の変化や都市化の波の中で、このような組織はほとんど姿を消した。仮に「子ども会」や「青年団」といった名称で特定の組織が残存していたとしても、それらは教育的な機能よりも、親睦的な機能がその役割の大部分を占めている。こういった組織を復活し、地域社会の教育機能を取り戻そうという声もあるが、一種のノスタルジーに過ぎない場合がほとんどである。

かわって、地域社会における子どもの生活の大部分を占めるようになったのが、習い事や地域のスポーツ活動である。2006年に玩具メーカーのバンダイが行った調査では（バンダイ2006）、12歳までの子どもの65%以上が月に1回以上習い事に通っているとのことである。その中でも、10%の子どもは月に20回以上習い事に通っていると回答しており、学校とほぼ同じ日数を習い事に費やしていることになる。習い事の内容としては、水泳が約27%と最も多く、15%前後でピアノ、英会話、書道と続いている。このように、現代の子どもたちにとって習い事は、もはや生活の一部になっているといえるだろう。

一方、地域のスポーツ活動のほうはどうだろうか。政策的には、地域社会における子どものスポーツ活動を活性化しようという動きが随所に見られる。文部科学省では、子どもの体力向上を至上命題に掲げ、総合型地域スポーツクラブの設立などを進めている。総合型地域スポーツクラブとは、実施種目や構成員、技術程度の多様性を備えたスポーツクラブを地域に設立し、地域住民の日常的なスポーツ活動の拠点となることを目指したものである。また、中央教育審議会の答申では、「スポーツ活動手帳」なるものを創設し、子どものスポーツ活動の記録や実施に活用するよう求める意見も出されている。このような政策的な動きとは別に、民間による地域のスポーツ活動はもっと盛んである。リトルリーグに代表される少年野球は、古くから子どもたちの間に根付いてきたが、サッカーのクラブチームもかなりの数が設立されている。特に、日本のサッカー界を牽引するJリーグは、地域との共生を理念として掲げており、地域サッカースクールの開催やジュニアユースチーム、ユースチームの設立をJリーグへの参加要件としている。このため、Jリーグのクラブチームはおのおの子ども向けのサッカースクールを有しており、多くの子どもたちがそこに参加している。また、野球やサッカー以外にも、先ほど挙げた水泳など、子どもの地域スポーツ活動は隆盛を誇っているとも言えるだろう。

このように、習い事や地域スポーツ活動は、現代の子どもたちにとって重要な生活の一部となっている。しかも、そういった場では、大人の指導者や同年齢・異年齢の子どもた

ちとの対人関係が展開されており、子どもの発達にも何らかの影響を与えていると考えられる。特に、スポーツ活動においては、大人からの指導や仲間との協力、ライバルとの競争など、子どもの発達にとって重要な要素がいくつも見られる。子どもの発達社会学的研究の文脈で、地域におけるスポーツ活動を取り上げることは、不可避の情勢になっているといえるだろう。

### 3 スポーツと子どもの発達

では、子どもとスポーツとのかかわりは、これまでどのような観点から研究されてきたのだろうか。子どもとスポーツとのかかわりということで真っ先に思い起こされるのは、スポーツを通した子どもの身体的な発達についてである。運動生理学などの分野では、子どもが何歳ごろ身体のどの部分を最も発達させるのかなどについてはほぼ明らかにされているし（生田 2002 参照）、各種スポーツ競技が子どもの体力や運動能力、心肺機能の強化などどう関連があるのか随時明らかにされている。また、スポーツを通した子どもの心理的な発達に関しても、数多くの研究が蓄積されている。特に、チームスポーツの場合、競争心や協調性、自律性など数多くの心理的要素が要求されるので、チームスポーツ活動とこういった心理的要素の発達、道徳的発達とのかかわりを明らかにした研究が数多く目に付く。また、発達という文脈に即して考えれば、スポーツにおける親との関係が子どもの心身の発達に及ぼす影響を明らかにしようとする研究も散見される（佐々木・高橋 2001、武田・中込 2003、井上・山瀧・谷 2006 など）。これらの研究は、家族という視点からスポーツの影響を明らかにしようとするものである。

一方、スポーツが行われる場という点に着目すれば、やはり、学校教育（幼稚園や保育所も含めて）を舞台とした研究が数多く蓄積されている。幼稚園や保育所では、保育内容として「健康」が含まれており、これとの関連で保育における身体活動を取り扱った実践的研究などが数多くある。小学校以上の学校段階においては、体育科が正規の教科として組み込まれており、他の教科と同様、体育科の教育内容や教育方法、歴史などについて扱った数多くの研究が発表されている。また、小学校以上の学校段階においては、正規の体育の授業以外にも、特別活動としてのクラブ活動や課外活動としての部活動があるので、運動部活動に着目した研究も数多く存在する（白松 1995、東野 2003、長谷川 2005 など）。

以上のように、スポーツと子どもの発達を扱った研究は、多様な観点、多様な領域を対象として展開されてきたわけであるが、同時に、あまり研究が蓄積されてこなかったところ、等閑視されてきたところがあるのも確かである。それが、子どもの地域スポーツ活動に焦点を当てた研究である。

スポーツ社会学は、応用社会学の一分野として確立した学問である。ところが、社会学

という方法の性質上どうしても、マクロな分析からミクロな分析まで、研究対象が分散してしまう傾向がある。マクロ的な研究だけでも、近代社会においてスポーツが成立する過程を扱う社会史的研究、スポーツ産業やスポーツ・メディア、スポーツ・イベントなどに関する研究など様々なものがある。ミクロ的な研究では、スポーツの場で交わされる相互作用に関する研究、スポーツを通して再生産される身体規範やジェンダー規範に関する研究などがある。また、マクロ的な研究とミクロ的な研究の中間に位置するものとして、スポーツ・ファンの社会心理について扱った研究などもある。このように、社会学という名のもとに様々な研究対象が集まったスポーツ社会学だけに、子どもの地域スポーツ活動が取り上げられる頻度もそれほど多いとはいえない。実際、日本スポーツ社会学会の機関誌である『スポーツ社会学研究』を過去15年間分紐解いても、子どもの地域スポーツにかかわる論文は、赤堀・山口(2000)の1件のみである。

一方、体育科教育学や幼児教育学などで、子どものスポーツに関する研究をある程度蓄積してきた教育学でも、体育や幼児教育など公的な学校現場で行われる身体教育について分析することを中心的な課題としており、インフォーマルな活動である地域スポーツと子どもの発達に焦点を当てたものはあまり見当たらない。学校教育以外の教育を体系的に扱う社会教育学や生涯学習論でも、どうしても学習活動や街づくり活動が中心となり、スポーツ活動に焦点を合わせたものは少ない。ボーイスカウトや海洋少年団など野外教育の系譜に連なる研究が散見される程度である(田中1999など)。

このように、地域スポーツ活動と子どもの発達に関する研究は、既存の学問分野の中では、比較的等閑視されてきた領域である。しかし、先ほど述べたように、地域スポーツ活動も、現代社会にあっては、子どもの生活時間の重要な一部を占め、そこでは様々な人間関係が展開され、何がしかの知識や技術、規範、価値などが伝達されていると想定される。したがって、子どもの発達社会学的研究の対象として、その内実を明らかにしていく必要がある。

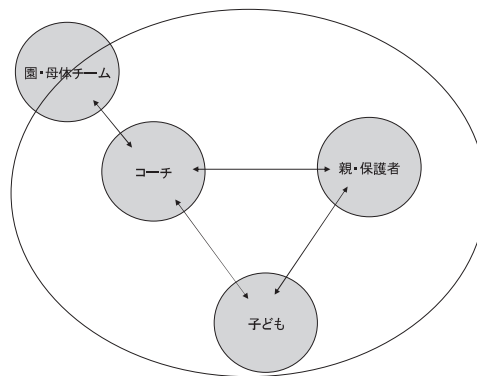
#### 4 本研究の目的

以上のような問題意識および先行研究の検討を踏まえて、本研究では以下のような課題を設定した。地域スポーツに子どもを通わせている親は、何を期待してそれにかかわっているのか、また実際に地域スポーツに子どもを通わせることによって、子どもにどういった側面が身に着いたと感じているのか、親の視点から見た子ども向け地域スポーツ活動への期待感と効用感を明らかにすることが本研究の課題である。事例とするのは、埼玉県に本拠地を置くJリーグ所属の大宮アルディージャが主催する子ども向けのサッカースクールと埼玉近郊の幼稚園・保育園において課外活動として実施されているサッカー活動である。

子ども向けのスポーツ活動の主役は、あくまでも子どもである。しかし、それは子どものみによって成り立っているわけではない。【図1】に示したように、親、園やチームの関係者といった大人がかかわる形で運営されている。特に、子ども向けのスポーツ活動の場合、入会や脱退の権限は、子どもの自発的な意思というよりも、親が決定する 경우가多く、その影響力は非常に大きい。したがって、子ども向けの地域スポーツにかかわる研究の1断面として、親の期待感や効用感を明らかにすることは、非常に重要な課題と考える。

また、先ほども述べたように、現在子ども向けのスポーツ活動は様々な種目が実施・運営されているが、サッカーは、野球や水泳、体操などと並んで、きわめて重要な種目のひとつである。日本のサッカー界を牽引するJリーグ自体が、その理念に地域との共生を掲げており、子ども向けのサッカースクールの設立を参加要件のひとつとしている。また、幼稚園や保育園などでも、みんなで参加できることから、専門の指導員などを招いて課外活動として実施しているところも多い。このように、現在の子どものためのスポーツ活動において、サッカーは非常に重要な役割を果たしており、本研究でも事例として取り上げることとした。

【図1】 子ども向け地域スポーツ活動をめぐる連関



## II 調査の方法と対象チームの概要

### 1 調査の方法

調査は、幼稚園の課外活動としてのサッカー教室に子どもを通わせている保護者 200名、関東地方をホームスタジアムに持つJリーグ1部に所属するチームが運営するサッカースクール（※以後、Jサッカースクールと呼ぶ）に子どもを通わせている保護者 200名の計 400名に対して、2007年3月～4月にかけて留置調査を行った。回収率は、全体が 76.3%、幼稚園・保育園が 81.5%、Jサッカースクールが 71.0%である。Jサッカース

クールの対象者は、就学前の子どもをもつ保護者、小学1年生の子どもを持つ保護者、小学2年生の子どもを持つ保護者の3者から構成されている。なお、対象者は、全員が埼玉県内に在住である。それぞれに配布した質問紙は、本報告書の最後に掲載している。

## 2 調査対象チームの概要

ここで、Jサッカースクールの子ども向けサッカースクールの概要を紹介しておこう（Jリーグ公式サイトおよびその他資料より）。Jサッカースクールは、平成19年度現在、Jリーグ1部リーグ（J1）に所属するクラブチームであるが、その下にサッカースクールを運営している。指導理念は、「子どもたちとサッカーの楽しさを共有」「各年代の指導カリキュラムに基づいた指導」「集団生活におけるコミュニケーションスキルの育成」の3つを柱に掲げ、「あいさつをすること」「時間とルールを守ること」「自分のことは自分でやること」「いろいろなことにチャレンジすること」を4つの約束として提示している。

スクールは、埼玉県下に8校を抱え、就学前の幼児から小学生を対象としている。本研究で調査対象としたのは、就学前の幼児と小学1年生・小学2年生である。開催時間や開催曜日は学年、各校によって異なるが、1回1時間程度を週2回行うといったペースである。費用も学年、各校によって異なるが、就学前の幼児の場合月2500円ないしは3500円、小学生の場合月4000円が一般的である。就学前の幼児や小学1・2年生の場合、その指導概要は次のように規定されている。「神経系発達の著しい時期のため、神経回路に多種多様な刺激を与えることを目指します。また子どもの想像力や発想力を重視し、子どもたちが楽しいと感じてくれるような指導を心がけます。」この概要にのっとって、第1週目には「ボールを飛ばすこと・受けること」、第2週目には「ボールを運ぶこと」、第3週目には「攻撃の基本戦術」、第4週目には「守備の基本戦術」、第5週目にはその月の復習やスモールゲーム」といった月間計画が立てられている。また、1日の指導も、ウォーミングアップから導入のトレーニング、スモールゲーム、トレーニング、スモールゲーム、クーリングダウン、ミーティングとおおよその流れが決められている。このように、かなり系統だったカリキュラムが組み立てられ、実践されている。指導に当たるのは、主にJスクール普及部のコーチであるが、それぞれインストラクターとしてのライセンスを有し、プロサッカーチームや大学などでの選手歴もある。指導者という点でも、かなり専門化された集団であるということがいえよう。

一方、幼稚園・保育園での課外サッカー活動のほうは、埼玉県下の幼稚園・保育園10校に協力をいただいた。協力いただいた10校は、東日本幼児サッカー協会に所属し、東日本幼児サッカー大会などの大会を開催している。たとえば、平成19年2月4日に開催された「第19回東日本幼児サッカー大会」には、調査対象となった10校を含め、64校が参加した。すべて課外活動としてサッカーを行っており、参加は自由意思に任されている。



る。それでも、指導者を外部から招くなど、本格的な指導に当たっているところも多い。近年、幼稚園と保育所との競合、子どもの絶対数の減少などから、幼稚園や保育園の経営は厳しさが増しつつあるが、音楽や文字の学習、体育など特定の分野に力を注ぎ、特色をアピールするところも多い。そういった意味では、サッカーの本格的指導も、各幼稚園・保育園の特色をアピールするためのひとつの魅力的な宣伝材料になっているといえるだろう。

### 3 調査対象者の概要

調査対象者の属性は、おおよそ以下のとおりである。まず、対象チームに所属している子どもの学年であるが、幼稚園・保育園調査では当然幼稚園児の子を持つ親が対象となる。一方、Jサッカースクール調査では、就学前の子ども（幼稚園児・保育園児）を持つ親、小学1年生の子を持つ親、小学2年生の子を持つ親の3種類を調査した。なお、それぞれの人数は以下のとおりである。幼稚園・保育園の課外活動に子どもが通う親が163名、Jサッカースクールに通う就学前児童の親が58名、同じく小学1年生の親が43名、同じく小学2年生の親が41名である。また、子どもの性別は、全員が男児である。Jサッカースクールに所属している子どもも、幼稚園の課外活動でサッカーを行っている子どもも、もともとほとんどが男児で占められており、本研究でも男児の親を調査対象とした。したがって、本研究では特に断りのない限り、「子ども」といった場合男児を指す。これは別に女児の存在を軽視しているとか、スポーツにおける発達に女児はあまりかわりがないなどといったわけではなく、サッカーというスポーツ自体が男児に選好されるよう、ジェンダー化された存在だからである。女児の発達とスポーツとのかかわりや、スポーツを通じたジェンダー発達などの問題については、稿を替えて論じていきたいと思う。

保護者の年齢分布は、25歳～29歳が4.3%、30歳～34歳が26.5%、35歳～39歳が54.6%、40歳以上が14.6%となっている。また、子どもとの続柄であるが、有効回答301のうち父親が回答した割合は8.6%（26名）、母親が回答した割合は91.0%（274名）、その他が0.3%（1名）となっている。したがって、以下で示すデータもほぼ母親の回答と見做しうるが、本稿では26名分の父親による回答も合算し、保護者による回答として提示していく。家計を主に支えている人の職業は、専門的・技術的職業が26.0%、管理的職業が12.5%、事務的職業が11.1%、営業的・販売的・サービスの職業が24.7%、保安的職業が1.7%、運輸・通信業が2.0%、生産工程・労務作業が11.5%、自営業が8.8%、その他が1.7%となり、農林水産業に従事しているものはいなかった。家族構成は、夫婦と子どもの世帯が80.5%、父親あるいは母親と子どもの世帯が2.3%、三世同居が15.4%、その他が1.7%となっている。これらを概観してわかるように、夫婦と子どもか

らなるサラリーマン世帯という色合いがかなり強くにじみ出ている。

### Ⅲ 分析の結果

#### 1 サッカースクールに対する満足度

まずは、運営主体ごとに、サッカースクールあるいはサッカー活動に対する満足度の差について分析していこう。【表1】を見てわかるように、幼稚園の課外活動であっても、Jサッカースクールであっても、「とても満足している」と回答した割合は、半数近くで均衡しており、きわめて高い。ただ、統計上有意差が検出されたので、注意してみると、「やや満足している」と回答した割合がJサッカースクールで高くなり、「どちらともいえない」と回答した割合が幼稚園のサッカー活動のほうで高くなる。この結果、全体的な満足度はJサッカースクールのほうで高いといえるだろう。

【表1】総合的満足度

p < 0.05

	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	あまり満足していない	全く満足していない	計
園の課外	47.5 (77)	<u>38.3 (62)</u>	<u>10.5 (17)</u>	3.1 (5)	0.6 (1)	100.0 (162)
Jのスクール	49.3 (69)	<u>46.4 (65)</u>	<u>1.4 (2)</u>	2.9 (4)	0.0 (0)	100.0 (140)
計	48.3 (146)	42.1 (127)	6.3 (19)	3.0 (9)	0.3 (1)	100.0 (302)

単位は%、括弧内は実数。以下同様

次に、個別の満足度について検証していこう。まず、【表2】に示すように、コーチやスタッフの指導に対する満足度であるが、Jサッカースクールのほうで、「とても満足している」と回答した割合が半数を超え、幼稚園よりも有意に高くなっている。先ほど紹介したように、Jサッカースクールのコーチは、ほとんどが選手としても活躍してきており、またコーチに関する専門的な訓練歴・資格を有している。こうしたコーチとしての質の高さが親の満足度にも反映されたものと思われる。

【表2】指導に対する満足度

p < 0.01

	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	あまり満足していない	全く満足していない	計
園の課外	<u>35.2 (57)</u>	44.4 (72)	13.6 (22)	4.9 (8)	1.9 (3)	100.0 (162)
Jのスクール	<u>56.4 (79)</u>	37.1 (52)	5.0 (7)	1.4 (2)	0.0 (0)	100.0 (140)
計	45.0 (136)	41.1 (124)	9.6 (29)	3.3 (10)	1.0 (3)	100.0 (302)

設備や環境に対する満足度であるが、【表3】に示すように、これもJサッカースクールのほうで高くなっている。Jサッカースクールの子どもたちにサッカーを修得させるた

め、専門的に設立された組織であり、専用のグラウンドなどを有している。一方、幼稚園のサッカー活動はあくまでも課外活動であり、練習や試合を行う場も、幼稚園の校庭や公共の公園などがほとんどである。こうした環境の差が親の満足度にも反映されたものと考えられる。

費用に対する満足度でも、大きな差が見られた。Jサッカー学校のほうが費用に対する満足度も高い。これは、金額の大小そのものではなく、費用の性質に由来すると考えられる。Jサッカー学校にかかる費用は、そのためだけに自発的に拠出することを決めたものである。一方、幼稚園の課外活動にかかる費用は、課外活動といってもほとんど幼稚園教育の一環として機能している。その結果、課外活動にかかる費用は、幼稚園の授業料プラスアルファという形で拠出することになる。こうした場合には、「授業料を払っているのに…」という意見も出やすく、それが結果的にJサッカー学校と比べて低い満足度になったと考えられる（ただし、幼稚園のほうでも、満足度の割合自体は決して低くない）。実際、保護者の経済的な負担感を尋ねた質問でも、幼稚園のほうがJサッカー学校に比べて、経済的な負担感を強く感じている（【表5】参照）。

【表3】設備・環境に対する満足度 p < 0.01

	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	あまり満足していない	全く満足していない	計
園の課外	21.6 (35)	44.4 (72)	24.1 (39)	9.3 (15)	0.6 (1)	100.0 (162)
Jのスクール	37.1 (52)	44.3 (62)	10.7 (15)	7.1 (10)	0.7 (1)	100.0 (140)
計	28.8 (87)	44.4 (134)	17.9 (54)	8.3 (25)	0.7 (2)	100.0 (302)

【表4】費用に対する満足度 p < 0.01

	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	あまり満足していない	全く満足していない	計
園の課外	19.1 (31)	37.0 (60)	38.3 (62)	4.3 (7)	1.2 (2)	100.0 (162)
Jのスクール	36.2 (51)	44.0 (62)	17.0 (24)	2.8 (4)	0.0 (0)	100.0 (141)
計	27.1 (82)	40.3 (122)	28.4 (86)	3.6 (11)	0.7 (2)	100.0 (303)

【表5】経済的負担感 統計上有意差はなし

	非常に感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じない	全く感じない	計
園の課外	0.0 (0)	11.7 (19)	23.9 (39)	46.6 (76)	17.8 (29)	100.0 (163)
Jのスクール	2.1 (3)	7.1 (10)	18.4 (26)	54.6 (77)	17.7 (25)	100.0 (141)
計	1.0 (3)	9.5 (29)	21.4 (65)	50.3 (153)	17.8 (54)	100.0 (304)

開催頻度や開始時間に対する満足度はどうだろうか（【表6】【表7】参照）。開催頻度に対する満足度では、幼稚園とJサッカースクールに統計上の有意差は見られなかった。多くの親が「とても満足している」「やや満足している」と回答しており、ほぼ不満はないといえるだろう。

一方、開始時間に関しては、双方で満足度に大きな差が見られた。幼稚園のほうで、「とても満足している」と回答する割合が、Jサッカースクールの倍近くに上った。これは、幼稚園のサッカー活動は、子どもを幼稚園に預けている間に行われるのに対し、Jサッカースクールのほうは、幼稚園や保育所、小学校から子どもが帰宅した後、再びサッカースクールまで送っていかねばいけないという点によるものと思われる。実際、時間的な負担感を尋ねた質問でも、幼稚園に比べてJサッカースクールのほうが、時間的な負担感を強く感じている（【表8】参照）。

【表6】開催頻度に対する満足度

統計上有意差なし

	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	あまり満足していない	全く満足していない	計
園の課外	25.3 (41)	46.3 (75)	21.6 (35)	6.8 (11)	1.2 (2)	100.0 (162)
Jのスクール	22.1 (31)	52.9 (74)	13.6 (19)	10.7 (15)	0.7 (1)	100.0 (140)
計	23.8 (72)	49.3 (149)	17.9 (54)	8.6 (26)	0.3 (1)	100.0 (302)

【表7】開始時間に対する満足度

p &lt; 0.01

	とても満足している	やや満足している	どちらともいえない	あまり満足していない	全く満足していない	計
園の課外	41.4 (67)	37.0 (60)	17.9 (29)	3.7 (6)	0.0 (0)	100.0 (162)
Jのスクール	23.4 (33)	49.6 (70)	18.4 (26)	8.5 (12)	0.0 (0)	100.0 (141)
計	33.0 (100)	42.9 (130)	18.2 (55)	5.9 (18)	0.0 (0)	100.0 (303)

【表8】時間的負担感

p &lt; 0.01

	非常に感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じない	全く感じない	計
園の課外	0.6 (1)	8.6 (14)	9.8 (16)	49.1 (80)	31.9 (52)	100.0 (163)
Jのスクール	0.7 (1)	26.1 (37)	18.3 (26)	41.5 (59)	13.4 (19)	100.0 (142)
計	0.7 (2)	16.7 (51)	13.8 (42)	45.6 (139)	23.3 (71)	100.0 (305)

最後に、もうひとつ結果を紹介しておこう。それは、「子どもにサッカーをいつまで続けさせたいか」というものである（【表9】参照）。この結果を見ると、幼稚園と比べて、Jサッカースクールに子どもを通わせている親のほうが、きわめて強く「大人になるまで」続けさせたいと考えていることがわかる。幼稚園のほうは、「大人になるまで」は20%強

に過ぎず、「小学校卒業まで」や「すぐにでもやめさせたい」に次ぐ程度の割合である。この結果は、Jサッカースクールに対する満足感を反映したものとも受け取れるし、またそもそもサッカースクールに期待するものの違いを反映しているとも受け取れる。次に、サッカースクールやサッカー活動に親は何を期待して子どもを通わせているのか、サッカーへの期待感についてみていこう。なお、継続年数、保護者の属性、子どもの年齢などと満足度との間に、統計上有意な差を見出すことはできなかった。

【表9】子どもにサッカーをいつまで続けさせたいか p < 0.01

	大人になるまで	高校卒業まで	中学卒業まで	小学校卒業まで	すぐにやめさせたい	計
園の課外	20.7 (31)	11.3 (17)	9.3 (14)	36.7 (55)	22.0 (33)	100.0 (150)
Jのスクール	57.6 (80)	7.9 (11)	8.6 (12)	25.9 (36)	0.0 (0)	100.0 (139)
計	38.4 (111)	9.7 (28)	9.0 (26)	31.5 (91)	11.4 (33)	100.0 (289)

## 2 サッカー活動に対する保護者の期待感

サッカー活動に対する期待感に関しては、次の13項目について、それぞれ5段階評定で尋ねた。「サッカーの技術を習得させたいから」「遊びとしてサッカーを楽しんでほしいから」「プロサッカー選手になってほしいから」「小学校での体育の授業に備えて」「体力や運動能力をつけたいから」「競争心をつけたいから」「自律性をつけたいから」「ルールや時間を守る習慣をつけたいから」「協調性をつけたいから」「同年齢の友人をつくってほしいから」「異年齢の友人をつくってほしいから」「大人とかかわらせたいから」「知り合いの子どもが参加しているから」の13項目である。これらは、技術的側面への期待感、道徳的側面への期待感、対人関係的側面への期待感という3つのカテゴリーを基にして作成した。このうち、「サッカーの技術を習得させたい」「プロサッカー選手になってほしい」「体力や運動能力をつけたい」「同年齢の友人をつくってほしい」「異年齢の友人をつくってほしい」「大人とかかわらせたい」「知り合いの子どもが参加しているから」の7項目で、幼稚園とJサッカースクールの間に有意な差が検出された。それを示したのが、以下の【表10】～【表16】である。

【表10】サッカーの技術を習得させたい p < 0.01

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	9.8	39.9	25.8	17.8	6.7	100.0
Jのスクール	43.3	46.1	3.5	7.1	0.0	100.0
計	25.3	42.8	15.5	12.8	3.6	100.0

【表11】 プロサッカー選手になってほしい  $p < 0.01$

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	<u>1.2</u>	<u>4.3</u>	20.9	30.1	<u>43.6</u>	100.0
Jのスクール	<u>7.8</u>	<u>12.1</u>	31.9	27.7	<u>20.6</u>	100.0
計	4.3	7.9	26.0	28.9	32.9	100.0

【表12】 体力や運動能力をつけさせたい  $p < 0.05$

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	<u>61.3</u>	30.1	6.1	1.2	<u>1.2</u>	100.0
Jのスクール	<u>47.5</u>	33.3	12.1	2.8	<u>4.3</u>	100.0
計	54.9	31.6	8.9	2.0	2.6	100.0

【表13】 同年齢の友人をつくってほしい  $p < 0.01$

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	<u>39.9</u>	<u>43.6</u>	14.1	<u>1.2</u>	1.2	100.0
Jのスクール	<u>29.8</u>	<u>36.9</u>	17.0	<u>13.5</u>	2.8	100.0
計	35.2	40.5	15.5	6.9	2.0	100.0

【表14】 異年齢の友人をつくってほしい  $p < 0.01$

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	<u>17.8</u>	<u>25.8</u>	37.4	<u>12.9</u>	6.1	100.0
Jのスクール	<u>9.9</u>	<u>17.0</u>	37.6	<u>24.8</u>	10.6	100.0
計	14.1	21.7	37.5	18.4	8.2	100.0

【表15】 コーチや他の親など大人とかわらせたい  $p < 0.05$

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	<u>8.0</u>	25.9	<u>43.2</u>	13.6	9.3	100.0
Jのスクール	<u>15.6</u>	29.8	<u>27.7</u>	19.9	7.1	100.0
計	11.6	27.7	36.0	16.5	8.3	100.0

【表16】 知り合いの子どもが参加しているから  $p < 0.01$

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	<u>1.2</u>	<u>3.1</u>	18.5	<u>20.4</u>	<u>56.8</u>	100.0
Jのスクール	<u>7.8</u>	<u>14.9</u>	17.0	<u>14.2</u>	<u>46.1</u>	100.0
計	4.3	8.6	17.8	17.5	51.8	100.0

これらを概観してわかることは、Jサッカースクールのほうには技術的な側面が、幼稚園のほうには友人関係の形成が強く期待されているということである。たとえば、「サッカーの技術を習得させたいから」では4倍以上の開きがある。また、「プロサッカー選手になってほしいから」という質問に「非常に当てはまる」と回答した割合も、Jサッカースクールで7.8%と予想以上に高かった。一方、幼稚園の課外活動には、サッカーに限らない一般的な「体力・運動能力をつけさせたいから」や「異年齢の友人をつくってほしい」「同年齢の友人をつくってほしい」「知り合いの子どもが参加している」といった子どもの友人関係の形成を期待する声が多数集まった。このように、専門的なサッカースクールと幼稚園の課外活動では、それぞれへの期待感もかなり異なる結果となった。

なお、統計的な有意差が検出されなかったが、以下の各項目で「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した割合の合算を、幼稚園/Jサッカースクールの順で示すと、以下のとおりとなる。「遊びとしてサッカーを楽しんでほしい」78.9%/70.9%、「小学校での体育の授業に備えて」15.9%/10.6%、「競争心をつけさせたいから」52.4%/40.5%、「自律性を育てたいから」70.6%/64.8%、「ルールや時間を守る習慣をつけさせたいから」78.5%/73.8%（園より小）、「協調性をつけさせたいから」88.4%/78.0%、となる。このように、競争心や自律性、協調性といった道徳的側面に関しては、概して幼稚園での課外活動への期待値のほうが高いといえるだろう。

このことは、Jサッカースクールが掲げていた理念との齟齬とも受け取れる。先ほど述べたように、Jサッカースクールでは、サッカースクールの理念として自律性やチャレンジ精神などを掲げていた。しかし、親の期待感としては、道徳的な側面よりも技術的な側面に重きが置かれている。もちろん、専門的なサッカースクールである以上、技術的な訓練はなおざりにはできないが、道徳的な理念をどう実現化していくのかは、ひとつの課題といえるだろう。

### 3 サッカー活動に対する保護者の効用感

サッカー活動で得られた効用感に関しては、次の12項目について、それぞれ5段階評定でたずねた。「サッカーがうまくなった」「いろいろな遊びを覚えた」「体力や運動能力が向上した」「競争心が身についた」「自律性が身についた」「ルールや時間を守るようになった」「協調性が身についた」「同年齢の友達が出来た」「異年齢の友達が出来た」「大人とかかわれるようになった」「サッカーが好きになった」「サッカー以外のスポーツや外遊びが好きになった」の12項目である。これらの項目も、期待感のときと同じく、技術的側面への効用感、道徳的側面への効用感、対人関係的側面への効用感という3つのカテゴリーを基にして作成した。このうち、「体力や運動能力が向上した」「自律性が身についた」「同年齢の友達が出来た」「異年齢の友達が出来た」「大人とかかわれるように

なった」「サッカーが好きになった」「サッカー以外のスポーツや外遊びが好きになった」の7項目で、有意差が検出された。結果は【表17】～【表23】に掲げるとおりである。

【表17】 体力や運動能力が向上した p < 0.01

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	<u>30.2</u>	48.1	<u>16.7</u>	3.1	1.9	100.0
Jのスクール	<u>13.6</u>	50.0	<u>30.7</u>	3.6	2.1	100.0
計	22.5	49.0	23.2	3.3	2.0	100.0

【表18】 自律性が身についた p < 0.05

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	6.2	<u>47.5</u>	40.7	<u>2.5</u>	3.1	100.0
Jのスクール	7.1	<u>36.4</u>	42.9	<u>10.7</u>	2.9	100.0
計	6.6	42.4	41.7	6.3	3.0	100.0

【表19】 同年齢の友達ができた p < 0.01

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	<u>42.0</u>	50.0	<u>6.8</u>	0.0	1.2	100.0
Jのスクール	<u>27.7</u>	51.1	<u>16.3</u>	3.5	1.4	100.0
計	35.3	50.5	11.2	1.7	1.3	100.0

【表20】 異年齢の友達ができた p < 0.01

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	<u>9.3</u>	<u>21.6</u>	42.6	<u>15.4</u>	<u>11.1</u>	100.0
Jのスクール	<u>3.6</u>	<u>10.0</u>	39.3	<u>22.9</u>	<u>24.3</u>	100.0
計	6.6	16.2	41.1	18.9	17.2	100.0

【表21】 大人とかかわれるようになった p < 0.05

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	<u>3.1</u>	<u>19.9</u>	<u>62.1</u>	10.6	4.3	100.0
Jのスクール	<u>7.9</u>	<u>32.1</u>	<u>46.4</u>	10.0	3.6	100.0
計	5.3	25.6	54.8	10.3	4.0	100.0



【表 22】サッカーが好きになった

p &lt; 0.05

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	<u>43.2</u>	39.5	<u>13.6</u>	1.9	1.9	100.0
Jのスクール	<u>59.3</u>	32.1	<u>5.7</u>	2.9	0.0	100.0
計	50.7	36.1	9.9	2.3	1.0	100.0

【表 23】サッカー以外のスポーツや外遊びが好きになった

p &lt; 0.01

	非常に当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	計
園の課外	21.0	<u>42.0</u>	<u>29.6</u>	3.7	3.7	100.0
Jのスクール	18.6	<u>25.7</u>	<u>40.7</u>	10.7	4.3	100.0
計	19.9	34.4	34.8	7.0	4.0	100.0

これらの結果を概観して分かることは、まず、幼稚園の課外活動を通しては、自律性や同年齢の友達、異年齢の友達、サッカー以外のスポーツや外遊びが好きになったといった道徳的側面、水平的対人関係的側面の効用感が大きいということである。有意差は検出されなかったが、「競争心が身についた」や「ルールや時間を守るようになった」「協調性が身についた」でも、Jサッカースクールに比べて、幼稚園のほうで高い効用感を記録している。つまり、全体的な傾向として、幼稚園のほうで道徳的側面、水平的な対人関係的側面の効用感が大きいといえるだろう。

一方、Jサッカースクールのほうは、体力や運動能力の向上、サッカーが好きになるといったサッカーに直接かかわる側面で、高い効用感が得られている。また、有意差は検出されなかったが、サッカーがうまくなったでも、幼稚園に比べて高い効用感を記録している。つまり、期待感のときと同様、サッカーにかかわる技術的な側面で、Jサッカースクールは高い効果を挙げているといえるだろう。この結果に対しては、2つの解釈が出来る。ひとつは、事実Jサッカースクールがサッカーの訓練において高い効果を発揮しているということである。その結果、保護者の側にも、サッカーの技術的側面に関して、高い効用感が得られたと解釈できる。もうひとつは、そもそもJサッカースクールに対しては、保護者の側から道徳的側面での効果を期待していないゆえ、道徳的側面に関する効用感においては高い値を記録しなかったとも考えられる。前節で触れたように、道徳的側面に関する保護者からの期待感は、その理念に反して、概して低かった。つまり、もともとサッカースクールを子どもの道徳的な発達を促すものとして見なしていないので、その効果を感じる部分も少ないという考え方も出来る。いずれにせよ、どういった部分に強く保護者の側が効果を感じているのかは、今後のカリキュラム運営や指導方針を考えていく上で、大きな示唆を提供するものといえるだろう。

#### 4 まとめ

以上、幼稚園の課外活動とJサッカースクールとを比較しながら、保護者の満足感や期待感、効用感などについて概観してきた。総じて言えることは、同じような年齢の子ども対象とした、同じ種目を実施する活動であっても、いかなる組織によってどのように運営されているのかによって、保護者からの満足度や期待感、効用感には大きな差があるということである。第1章でも触れたように、子ども向けの地域スポーツ活動の場合、保護者の意味づけが子どもの参加や脱退、活動へのかかわり方に大きな影響を及ぼしている。それは、ひいては子どもの発達や社会化にも影響を及ぼすということである。その意味で、今後、それぞれの活動が足りない部分を補っていくということが重要になるだろう。

#### 参考文献

- 赤堀方哉・山口泰雄 2000、「地域における子どもスポーツへのコミットメントがコミュニティ・モラルに及ぼす影響に関する研究」日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』第8巻
- バンダイ 2006、『バンダイ子どもアンケートリポート vol. 128』
- 長谷川祐介 2005、「高校部活動の多様性が持つ影響力の違い—パーソナリティへの影響を中心に—」『日本特別活動学会研究紀要』第13号、43-52頁
- 東野充成 2003、「部活動と中学生の対人関係—教師・生徒関係を中心に—」『日本特別活動学会紀要』第11号、64-74頁
- 生田香明 2002、『現代身体教育論』放送大学教育振興会
- 井上芳光・山瀧夕紀・谷玲子 2006、「母親の運動経験・活動性が幼児の運動量・運動能力に及ぼす影響」『日本生理人類学会誌』11巻1号、1-6頁
- Mead, G. H. 稲葉三千男訳 2005、『精神・自我・社会』青木書店
- Parsons, T., Bales, R. F. 橋爪貞夫訳 2001、『家族—核家族と子どもの社会化—』黎明書房
- 佐々木晴美・高橋人美 2001、「母親のスポーツ活動が幼児の心身に及ぼす影響について」『聖徳大学研究紀要 短期大学部』第34号、65-72頁
- 白松賢 1995、「生徒文化の分化に与えた部活動の影響—高等学校を中心に—」『子ども社会研究』創刊号、80-92頁
- 住田正樹 2000、『子どもの仲間集団の研究』九州大学出版会
- 住田正樹 2001、『地域社会と教育』九州大学出版会
- 武田大輔・中込四郎 2003、「子どもに対する親の行動に伴うメッセージと競技における子供の認知・情動的態度との関係：ジュニアサッカー選手を対象として」『体育学研究』48巻、421-438頁
- 田中治彦 1999、『少年団運動の成立と展開』九州大学出版会

**付記：**この論文は、平成19年度に採択された、岡野研究奨励補助金により作成されたものである。